

# ひまわりだより

No.307

2023年12月



巾上ひまわり薬局 松本市巾上10-5 TEL 0263-35-4441  
FAX 0263-37-5561  
塩尻ひまわり薬局 塩尻市長畝230-3 TEL 0263-51-5311  
FAX 0263-51-5322

定休日 日曜・祝日



9月に国内での製造販売が承認された  
新しいアルツハイマー病の治療薬  
「レカネマブ（商品名；レケンビ®）」は  
病気を発症させる原因タンパク質「アミロイド  
β」を除去する効果が期待される新しいタイプの薬で、早ければ年内  
にも患者さんへの投与が可能となります。



## ◆現状

認知症を患う高齢者数は  
2025年には約700万人、65  
歳以上の約5人に1人に上る  
と試算されています。

認知症は大きく4つに分類さ  
れます。

それぞれに典型的な症状があ  
りますが、これらが複数くみあ  
わさって発症することもあり、

**アルツハイマー型認知症**  
認知症の約半数を占める



初期症状：もの忘れ等

**血管性認知症**  
脳血管障害が原因



初期症状：手足のしびれ

**レビー小体型認知症**  
早いと40歳頃発症



初期症状：幻視・手の震え

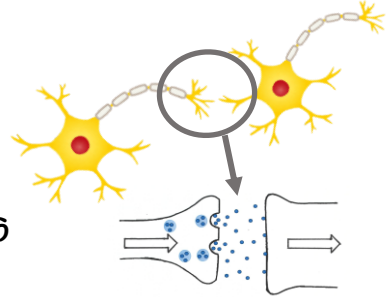
**前頭側頭型認知症**  
難病にも指定



初期症状：社会性の欠如

実際には複雑な症状を示します。

認知症全体の70%近くを占めるといわれるアルツハイマー病は、なんらかの原因で脳神経細胞の外側にアミロイドβというたんぱく質が、蓄積することがきっかけとなって、神経細胞の内側にタウたんぱくとよばれる物質が蓄積することにより、神経細胞が障害を受け減少してくことが原因と考えられています。



神経細胞の一つ一つはお互にくっついているわけではなく、様々な神経伝達物質がすきまを行きかうことで情報を伝達します。このうち、

脳内のアセチルコリンという神経伝達物質が関係する神経系が障害されると、記憶障害や実行機能障害、見当識障害などの障害…いわゆる認知機能障害の症状が現れます。

現在アルツハイマー病については、1999年に「アリセプト®」が発売されて以来、4種類の薬が使用されています。このうちの3種類は脳内のアセチルコリンを増やすことで認知機能の低下の進行を抑制する働きを持っています。

#### ◆レカネマブとはどのような薬なのか？

一方、レカネマブは神経細胞を壊すきっかけとなるアミロイドβの除去を目的とする新しいタイプの薬で、2週間に一度1時間ほどかけて点滴投与します。

残念ながら、すでに壊れてしまった神経細胞を再生する効果はないので、投与対象はアミロイドβが蓄積し生活に支障がではじめた人と

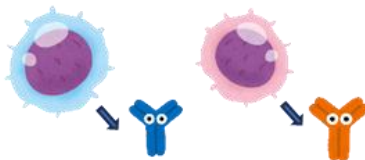
その前段階の軽度認知障害(MCI)の人に限られています。

また、使用に際しては、アミロイド $\beta$ が蓄積しているかどうかを確認する検査(アミロイドPET検査や脳脊髄液検査などの特殊な検査)を必ず行う必要があります。

レカネマブは抗アミロイド $\beta$ 抗体と呼ばれ、モノクローナル抗体に分類されます。

モノクローナル抗体とは  
ただ1種類のB細胞が作る抗体のコピー(クローン)という意味です。

ヒトの体にはがん細胞などの自分でない細胞や、体内に侵入した細菌やウイルスなどに対して免疫細胞のB細胞が異物(=抗原)をやっつけるために抗体を作る仕組みがあります。



体内には色々なB細胞があり、それぞれが認識した抗原に対して1種類の抗体を作ります。

この仕組みを利用して、幾多のB細胞の中から特定の抗体を作るB細胞だけを選んで、その抗体を大量に作ることができれば医薬品として期待できるという発想から生まれたのがモノクローナル抗体です。

現在では、がんやアトピー性皮膚炎、喘息、新型コロナウイルス感染症など様々な疾患の治療に用いられています。

レカネマブはアミロイド $\beta$ をやっつける抗体を人工的にクローン増殖させたものということになります。

## ◆安全性はどうか？

治療の初期に、アミロイド関連画像異常(ARIA)と呼ばれる有害事象が報告されています。

発症初期は無症状の小さな出血や脳のむくみなのですが、進行すると頭痛や錯乱、めまいなどの症状が出現します。

これらを早い段階でチェックするために、決められた間隔でMRI検査をすることが義務付けられています。

- ・アミロイドβの蓄積など適正な判断ができること
- ・MRIでARIAを定期的にチェックしていくこと
- ・学会からの認定を受ける必要がある

など、処方する医療機関の側にも様々な条件が設定されています。

## ◆今後

治験の段階では症状の悪化を抑制できた割合が27%となっていて、必ずしも効果が現れるわけではないということも頭におかなければいけません。症状の進行が遅くなることで、介護施設に入るタイミングが遅くなる・家族と過ごせる時間が延びる・・・など患者さんや家族によって意義ある効果が生まれる可能性はあり、認知症の知慮が新たなステージを迎えたと前向きにとらえることができるのではないのでしょうか。

処方する側・される側双方に条件があり、気軽に開始できる薬ではない印象がありますが、今後を見守りたいものです。

近年では、タウたんぱくを除去する働きのある薬の開発も始まっているようです。再生医療の発達もめざましいものがあります。アミロイドβによって損傷した神経細胞そのものが再生する未来も・・・期待したいものです。



❖ ひまわり薬局ではホームページも開設しています ❖

<http://www.himawari-ph.nagano.jp/>

こちら是非、ご覧ください ☺